

西洋児童美術教育の思想：
ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか？

はしがき——なぜ子どもに描画させるのか

ドローイング (Drawing) とは、「線を引く行為」ないしその行為の産物としての「線描」、「素描」、「描画」を指す言葉である。そこから発展して「何かを引き出す」という意味で用いられることもある。私たちは旧石器時代と呼ばれる大昔からこの行為を実践してきた。そしてこの行為がいつしか学ぶべき項目として学校教育に取り込まれ、今日にいたっている。日本の初等教育では、「図画工作」の授業名のもとで子どものグラフィックな制作物が図画と呼ばれ、素描もそのなかの一つに含まれる。初等教育において生徒にドローイングを学ばせる傾向は国際的にも普及しており、この翻訳集のなかで明らかなように、近代以降、ドローイングの教育はいくどとなく自らの理念と方法を修正変更しつつも継続されてきた。しかしここに私たちを本稿の翻訳へと向かわせた素朴な疑問がある。

子どもにドローイングを学ばせる意味とは何だろうか？ 振り返ってみれば、すでにルネサンスの時代から、ドローイングは美術アカデミーで教えられ、画家に限らず造形芸術家になるための専門的な訓練として位置づけられてきた。現代においては、私たちは芸術家を目指しているわけでもない子どもに「お絵かき」をさせているわけだが、それが一般的に「よい」こととされるのはなぜだろうか。とりわけ美学・芸術学を専門とする本書の編者・訳者たちの立場からすれば、この「よい」という形容詞は、論理的な「よい」（つまり「真である」）ということを目指しているのか、あるいは倫理的な「よい」（つまり「善である」）を指しているのか、それともやはり美的な「よい」（つまり「美である」）を指しているのか、さほど明確には区別されていないようにも思えたのである。というのも、本書において訳出した文章を読んでいただければお分かりのとおり、子どもにドローイングを教えることの利点として、子どもに正しい観察力を身に付けさせるという論理的な「よい」にかかわる口実も、また子どもに忍耐力を身に付けさせるという倫理的な「よい」にかかわる口実も、そして——今日の児童美術教育において一般的となつ

ている——子どもに豊かな感受性を身に付けさせるという美的な「よい」にかかわる口実も、すべてそれぞれの時代の児童美術教育の大家たちによって唱えられてきたからである。そこから、現代の私たちにはもう一つの問いが生じる。すなわち、このように理念も方法も曖昧な児童美術教育において、そもそも子どものドローイングを正しく評価し、その評価にもとづいて子どもの発達を正しく導くことは可能なのだろうか？ そしてまた、もし現代の私たちが考えているように児童美術教育の目的が子どもの感受性を育むことにあるのだとすれば、そもそもそうした美的な能力を体系的に教育するということは本当に可能なのだろうか？

ドローイングを教育するということのためには、乗り越えねばならない複数の課題があり、それぞれの時代の先達がこれらに対処するための方策を練り上げてきた。先述のとおり、児童美術教育の最初のモデルは西洋の美術アカデミーであり、それは1563年にジョルジョ・ヴァザーリ (Giorgio Vasari, 1511-74) がミケランジェロを副総裁に迎え、また36人の芸術家を会員に選出してフィレンツェに設立したアッカデミア・デッレ・アルティ・デル・ディゼーニョ (Accademia delle arti del disegno) に端を発するとされ、そこでは伝統的に自然観察を出発点とした科学的な方法論が推奨された。ところが、18世紀以降、大人とは区別される子どもの特性なるものが広く議論されるようになると、今度は子ども向けに特化された教育法が考察されるようになる。すなわち、子ども本来の内的自然や能力を、その特性を損なうことなく引き出す方法が重視されたのである。英国ではジョン・ラスキンが、その産業革命に対する批判とヴィクトリア朝時代特有のキリスト教的道徳観を背景に、ドローイングに関する自己陶冶的な道徳教育の観点を決定的に強調することになった。このように近代以降、市民革命や産業革命、戦争など大規模な社会変動も背景として、そのつど、ドローイングの教育は「技術」、「道徳」、そして今日の「感受性」や「創造力」といった観点から見直されてきた。往々にして「技術」は「工学」と「芸術」の二つの領域を横断する課題を示し、「感受性」と「創造力」は「豊かな人間性の獲得」と「芸術家養成」の二方向にまたがる要因とされるため、いつそラスキンのようにドローイングを「道徳」

教育の一環とみなしてしまえば問題はずっと単純だったのかもしれない。しかし、そのつど異なる目標や目的のもとで教育内容を修正し続けながら、なお「子どもらしさ」を重視する児童美術教育は、子どもが「主体的」に、言い換えれば「自由」かつ「自発的」に線を引くことに執着する。

周知のとおり、教育であれ美術であれ、そこでなされる行為や産物は簡単には数量化しがたいものであるがゆえに、その体系化も極めて困難である。ここに訳出した原稿は——あるときは心理学の力を借りたり、またあるときは進化論や社会学を援用したりしつつ——子どもにドローイングを教育する方法をめぐる試行錯誤の軌跡である。この試行錯誤は過去のものではない。子どもの自発的な「感受性」を教育するという目標が内包する逆説は、例えばピーマンを食べるのが嫌いな子どもに、いくらピーマンの栄養価を教えようが、いくら好き嫌いをなくすことの重要性を説こうが、「自発的に」ピーマンを美味しく感じるよう教育することはできない、ということからも明らかである。私たちはピーマンの嫌いな子どもが自然にいつの間にかピーマンを好きになるよりも前に、教育を通じて「ピーマンは美味しい」と感じさせられるというのと同様のことを、どういうわけか児童美術教育においては信じているのである。当然ながら、そうした信念にもとづく限り、児童美術教育は独善的な方法か、あるいは経験則に依拠した場当たりの方法しか採用することができない。本書がこうした困難を少しでも解消するための手立てとなるよう、訳者一同、心から願っている。

なお、原註に挙げられた文献については、その日本語訳がある場合はその書誌を併記している。ただし、前後の文脈を考慮して、必ずしも既存の翻訳のとおりにはなっていないことを断っておく。また現代から見れば非科学的、あるいは差別的な文章が現われることもあるとはいえ、児童美術教育の思想史をたどるという本書の意図に鑑み、それらの文章も修正することなく訳出した。

平成 29 年 2 月

要 真理子／前田 茂

西洋児童美術教育の思想：ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか？／目次

はしがき——なぜ子どもに描画させるのか	i
凡例	ix
監訳者序文	3

第1章 リチャード・セント・ジョン・ティリット

——道徳教育としてのドローイング

解説	23
『絵画技術の手引書』	26

第2章 コッラード・リッチ

——美術史による「児童美術」の発見

解説	46
『子どもの芸術』	49

第3章 ベルナール・ペレ

——子どもの認知能力とドローイング

解説	89
「子どもにおける芸術：素描」	92

第4章 トーマス・アブレット

——ドローイングの「一般教育」化

解説	118
『初等学校における素描教授法』	122

第5章 スーザン・ブロウ

——子どもの神的な想像力への寄り添い

解説	142
『象徴教育』	146

第6章 エベニーザー・クック

——外なる自然から子どもの内なる自然へ

解説	167
「美術指導において見過ごされてきた諸要素」	170
「幼児教育におけるいくつかの実験」	197

第7章 ジェイムズ・サリー

——「プリミティヴ」としての原始・未開・子ども

解説	207
『児童期の研究』	211

第8章 フランツ・チゼック

——子どもの無垢なる創造性を拓く

解説	242
「オーストリアの産業教育機関における自由デッサンの教授法」	246
フランチェスカ・ウィルソン『チゼック教授の講演』	252
フランチェスカ・ウィルソン『チゼック教授の教室(主題：秋)』	265

第9章 ロジャー・フライ

——モダンアートによる児童美術の再定義

解説	275
「ブッシュマンの芸術」	278
「子どものドローイング」	291
「芸術を教える」	299

第10章 マリオン・リチャードソン

——観察（外的自然）と自由（内的自然）の間で

解説	304
1925年第2回ロンドン市評議会講演	308
「子どもの描画とデザイン」	324
「マリオン・リチャードソン女史による解説」	334

第11章 リチャード・シフ

——社会史のなかの子どものドローイング

解説	337
「原始的系統発生から形式主義的個体発生へ ——ロジャー・フライと子どものドローイング」	340
あとがき	409
人名索引	413

訳者紹介（訳者 50 音順）

加藤磨珠枝（かとう ますえ）

立教大学文学部教授。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程芸術学専攻修了、博士(美術)。専門は、西洋中世美術史、美術批評。近著に *Yoshitomo Nara: Drawings 1984-2013*, Blum & Poe (2014)、『西洋美術の歴史 2 キリスト教美術の誕生とビザンティン世界』（共著）中央公論新社（2016）。

島本 英明（しまもと ひであき）

パリ・ナンテール大学大学院美術史学研究科修士課程在学。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程芸術学専攻単位取得退学。2007年より2015年まで、ポーラ美術館学芸員。専門は、フランス近現代美術史、日仏交流史。

立野 良介（たつの りょうすけ）

同志社大学嘱託講師、成安造形大学非常勤講師。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程芸術学専攻修了、博士（文学）。専門は、環境美学、現代ドイツ美学。訳書に『堀典子——生涯と作品』（ヨハン・コンラート・エバーライン著）求龍堂（2006）。

山本 樹（やまもと いつき）

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程芸術学専攻在籍。2016年10月よりボローニャ大学大学院修士課程視覚芸術専攻(美術史)に留学中。専門は、16～17世紀イタリア美術史。

監訳者

要 真理子 (かなめ まりこ)

跡見学園女子大学文学部准教授。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程芸術学専攻修了、博士(文学)。専門は、英国モダニズム、美術批評研究。主著に『ロジャー・フライの批評理論 知性と感受性の間で』東信堂(2005)。

前田 茂 (まえだ しげる)

京都精華大学人文学部教授。大阪大学大学院人文学研究科博士課程後期課程芸術学専攻修了、博士(文学)。専門は、映画論、イメージ文化論。訳書に『イメージと意味の本 記号を読み解くトレーニングブック』フィルムアート社(2013)。

Children's Drawings and Their Education : selected writings

西洋児童美術教育の思想：ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか？

2017年5月25日 初版第1刷発行

[検印省略]

*定価はカバーに表示してあります。

監訳者 © 要真理子・前田茂 発行者 下田勝司

印刷・製本/中央精版印刷株式会社

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

発行所
株式
会社 **東信堂**

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023 Japan

E-Mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1428-2 C3037 ©KANAME Mariko・MAEDA Shigeru